

海外の高等教育におけるアカデミック・ジャパニーズとは —香港の学習者へのインタビューを通して—

瀬尾匡輝

要旨

本稿では、香港の大学で副専攻として日本語を履修する学習者 6 名への半構造化インタビューから、彼・彼女らの大学における日本語学習の位置づけや経験を考察し、海外の教育現場である香港でどのようにアカデミック・ジャパニーズを実践すべきか検討する。調査の結果、調査協力者らが盲目的な日本への憧れから余暇活動と消費 (Kubota 2011) として学習し、メディアなどで目にした日本語や日本文化を無批判に受け入れていることがわかった。目標言語圏へのステレオタイプが問題となる海外の日本語教育現場 (e.g. 熊谷 2008) では、門倉 (2006) が述べるような「市民的教養」からの批判的思考能力が特に重要であるだろう。

キーワード

海外、インタビュー調査、市民的教養、批判的思考能力、余暇活動と消費

1. はじめに

筆者は現在香港の大学で主に初級の日本語クラスを担当しているが、その中には、民間の語学学校ですでに日本語を学習してきた者や今も語学学校に通いながら大学で日本語の授業を履修する者に加え、日本のアニメやドラマ、ゲームといった媒体から日本語に興味を持ち、独学でインターネットや日本語学習書籍、アニメ、ドラマ、ゲームそのものから日本語を学んでいる者が多数在籍している。そのような学習者にとっての大学での日本語授業の位置づけは、これまで「大学卒業後に日系企業に就職するため」「すでに日本語を学習していて、よい成績を取りやすく、GPA⁽¹⁾を上げられるため」と多くの教師が見ているようであったが、筆者は一概にそのように言いきれぬのか疑問を持つようになった。その背景には、このような学習者らが一度も授業を休むこともなく、率先して活動に参加し、既習にも関わらず意欲的に授業に耳を傾けており、大学での日本語学習そのものに彼・彼女らは何らかの意味を見出しているように感じたからである。そこで、本稿では、独学や語学学校で日本語を学びながらも、大学で日本語を履修する学習者らの大学における日本語学習の位置づけや経験を考察し、海外の教育現場である香港でどのようにアカデミック・ジャパニーズを実践すべきか検討する。

2. 先行研究

2.1 アカデミック・ジャパニーズとは

アカデミック・ジャパニーズの定義は日本留学試験の目的の記載によると、「日本の大学での勉学に適応できる日本語力」(調査研究協力者会議 2000: p. 4) となっているが、この定義は曖昧でわかりにくいという議論がこれまでなされてきている (e.g. 森 2005)。

これまでのアカデミック・ジャパニーズの定義で概ね一致しているのは大学教育に対応できる日本語力を指している点ではあるが、果たして日本語力のみを育成するだけでいいのであろうか。特に、海外の大学で日本語を履修する学習者は語学の授業以外にそれぞれの専門を持ち、必ずしも日本への大学進学を目指していない傾向にある。その中で、日本語の授業が大学で開講され高等教育の一翼を担う以上は、海外の大学における日本語授業の位置づけを今一度検討する必要があるのではないだろうか。

門倉 (2006) はアカデミック・ジャパニーズの土台として「市民的教養」(p. 17) の重要性を主張している。市民的教養とは中等教育までの知識注入型の受身的な学習とは異なり、学習者自らが問題を発見し、実社会で自己と他者との関わりを通して問題を解決していく能動的な学習のことである。このような議論は大学における専門教育志向と職業志向を排除し、教養教育を推進したハッチンス (1968) の学習社会の議論を契機にしており、高等教育機関である大学における教養教育のあり方が検討され始めるきっかけとなった。その後、海外の先進国の大学では、1) マスメディアの発達やグローバル化の影響により、氾濫する情報やイデオロギーを含んだ政治的主張を批判的に読み取る力が必要とされること、2) 大学の大量化により様々な学力レベルの学習者が大学で学ぶことになり、学術論文が書けるように学習者の思考能力を養う必要があることから、「教養教育」と「市民的教養」という視点から、批判的思考能力の育成が叫ばれるようになった (楠見ら 2011)。このような批判的思考能力の育成は、外国語環境下で学ぶ日本語学習者にとっても必要であると考えられる。熊谷 (2008) は日本語や日本文化との接触場面の少ない外国語環境下では目標言語圏に対するステレオタイプの構築が問題となり、教師や教科書がさらにそのステレオタイプを助長する危険性を指摘している。そのような中で、学習者自らの考えやこれまでの知識を用いて批判的に考察していく批判的思考能力が海外の大学で学ぶ学習者には必要とされているのではないだろうか。

2.2 香港という地域

香港の日本語学習者は 28,224 人と世界で 9 番目に多く、700 万人という人口規模を考えると、その人気は極めて高いということがわかる (国際交流基金, 2011)。その人気を支える背景には、日本の製品や商品が店頭で陳列されたり、街中の至るところに日本料理店があるなど、日本のものが日常生活に浸透していることがある。このような環境にいるためか、学習者の多くは映画、ポップカルチャー、日本の製品・商品、食べ物、旅行といった関心や目的から日本語を学習していることがすでに報告されている (木山ら 2011)。また、日本の物や旅行への興味関心だけではなく、日本語を学ぶ行為そのものを趣味として楽しんでいる現状も近年の調査では明らかになっている (久保田ら 2012; 瀬尾・山口 2012)。このような学習は「余暇活動と消費としての外国語学習⁽²⁾」と捉えられ、学習者は満足感や喜びのために外国語を学習し、目標言語や母語話者を商品として消費しているのである (Kubota 2011) と指摘されている。香港においては、これまで生涯学習機関である語学学校の学習者 (瀬尾 2011a; 2011b; 瀬尾 2013) や独学の学習者 (瀬尾・山口 2012) が余暇活動と消費としての日本語学習を行っていることが明らかにされてきた。しかし、高等教育機関である大学の学習者に関する調査はまだなされていない。学位取得や就職のためといった文化資本を獲得蓄積することが第一の目的であると考えられる大学で

も果たして同じことが言えるのであろうか。そこで、独学や語学学校で日本語を学習しながら大学でも日本語を履修する学習者⁽³⁾にインタビュー調査を行い、大学という高等教育機関で日本語を学習することの位置づけとその経験を探ることにした。

3. 調査の概要

本調査では、香港の大学で副専攻として日本語を履修する学習者 6 名へ半構造化インタビューを行った。インタビュー調査を行ったのは、質的調査を行うことで学習者の内面をより深く分析できると考えたからである。調査協力者は筆者が希望者を募り、それに応えてくれた学習者を選んだ。以下に調査協力者のプロフィールを記す。

表 1 調査協力者のプロフィール

名前 (仮名)	性別	出身	学年	専攻	大学での授業受講前の日本語学習歴	言語
アン	女性	北京	3 年生	中国語	独学で半年	北京語、広東語、英語、日本語
クリス	男性	香港	3 年生	会計学	独学で 1 年半	北京語、広東語、英語、日本語
シンシア	女性	香港	2 年生	英語	語学学校で 2 年半	北京語、広東語、英語、日本語、スペイン語
ドリーン	女性	香港	2 年生	中国語	語学学校で 2 年	北京語、広東語、英語、日本語
ジョイス	女性	香港	2 年生	会計学	語学学校で 3 年、日本語能力試験 N3 合格	北京語、広東語、英語、日本語
マイケル	男性	香港	2 年生	コンピュータ	語学学校で 2 年と独学で 3 年、日本語能力試験 N2 合格	北京語、広東語、英語、日本語

インタビューは 2012 年 11 月に実施し、1) 日本語学習を始めたきっかけ、2) 語学学校や独学で日本語を勉強しているにも関わらずなぜ大学で副専攻として履修しているのか、3) 語学学校・独学・大学での日本語学習経験、4) 将来日本語をどのように使っていきたいか、5) 日本語学習でのアカデミックとは何だと思おうかを中心にそれぞれ 1 時間ずつ行った。アン、クリス、シンシア、ドリーンには英語でインタビューを行い、録音した全データを筆者が翻訳した。ジョイス、マイケルには日本語でインタビューを行った⁽⁴⁾。

データの分析では、まず全てのインタビュー・データを書き起こしたものを読み込みながら、調査目的である調査協力者らの日本語学習の位置づけと経験についてカテゴリーを生成した。その後、調査協力者らの語りから浮かび上がってきた複数のテーマ：

- 1) 日本語を勉強し始めたきっかけと将来日本語を使つての目標
- 2) 独学・語学学校・大学での日本語学習経験
- 3) 日本人・日本語・日本文化

4) アカデミック・ジャパニーズ

に分類し、分析を行った。インタビュー・データから直接本文に引用した箇所は「」で示す。

4. 結果と考察

4.1 日本語を勉強し始めたきっかけと将来日本語を使って何をしたいか

調査協力者らが日本語を勉強し始めた理由は概ね一致していた。シンシアが「香港のみんなそうだと思いますけど、日本のポップカルチャーが好きで、最初勉強しました」と述べるように、本調査の協力者全てがアニメや漫画、ドラマ、映画、J-pop といった日本のポップカルチャーへの興味から日本語を学習していることが窺えた。

最初は J-pop とか、漫画とかが好きだから、日本語を勉強したいです。あの、J-pop の曲がわからないから、本当に歌詞とか知りたいですから。(ジョイス)

最初アニメとか、漫画を見るのが好きで、そこにある日本語、例えば「キャー」とか、「わぁー」とかの意味が何なのか知りたくて、インターネットで調べて日本語に興味を持ちました。(クリス)

やっぱりアニメとか、日本の音楽とかに興味があるからです。(マイケル)

日本の字幕のないドラマを見て、わかるようになりたいです。(ドリーン)

このように調査協力者らは自身が興味を持っていることをより楽しむために日本語の勉強を始め、日本語を「趣味」(マイケル、ジョイス)として消費 (Kubota 2011) していた。

しかし、日本語学習を趣味的な側面から捉えながらも、もしもの話と仮定した上で、「もしもっと日本語が上手になったら、翻訳家になりたい」(シンシア)、「(香港にある日系出版社の) 旅行やファッション雑誌の記者になりたい」(ドリーン)、「今は中国の人も日本とビジネスをたくさんしているから、将来は多国籍企業で働きたい」(アン) というように日本語を将来の仕事に生かすため、つまり文化資本を獲得蓄積するための投資 (Norton 1995) として日本語学習を捉えている側面も趣味と同時に混在していた。

4.2 独学や語学学校での学習から大学での日本語学習へ

大学で日本語を履修するまでアンとクリスは独学で日本語を学習しており、シンシア、ドリーン、ジョイス、マイケルは大学で日本語を履修しながら今も語学学校で学習している。独学で日本語を学習していた調査協力者は最初アニメや漫画などで目にするわからないことばや文法をインターネットや本を使って調べ、学習を行っていた。

アニメを見て、登場人物が使っている表現でわからないものがあったら、インターネットで調べて、意味を理解していました。(アン)

そして、調べて理解するだけではなく、頻繁に現れる表現を自然と覚えていた。

字幕付きのアニメを見ていて、同じ文を何回も聞いて、同じ字幕をいつも見ていると、それに気づいて、日本語を覚えました。例えば、「遅刻しちゃうよ」とか。
(クリス)

しかしながら、このような日本語学習は「正しいのか」(アン) どうかわからず、また「誰とも話す機会がない」(クリス) ため大学で日本語を履修することにした。

インターネットの情報には、ある人はこう説明して、別の人はまた別のことを言っていて、どれが正しいのかわかりません。(アン)

勉強という感じはしなくて、ただ覚えてただけな感じです。それに誰とも話す機会がないし、コミュニケーションがしたかった。(クリス)

一方、語学学校で日本語を学習する調査協力者らも語学学校での学習が文法学習にあまりにも焦点が当てられすぎていると感じ、日本語を使って話す機会を求めている。

私の語学学校は読解と文法に焦点を当てすぎて。だから、文章は簡単に理解できるけれども、全然話せなくて、日本語でコミュニケーションができません。
(シンシア)

(香港人の) 先生はクラスで文法だけを教えています。何か私が質問すると、文法については広東語で説明をしてくれます。でも、先生は日本にあまり興味がなくて、今の日本語とかは全然知りません。(ドリーン)

先生は文法にフォーカスをして、あまり話す練習をしてくれません。
(マイケル)

(語学学校では) 文法の説明が多い。(学習者が) 話すチャンスがないです。
(ジョイス)

このように独学の学習者も語学学校の学習者も「日本語でコミュニケーションする」(シンシア) 機会があまりなく、「先生が日本人」(ジョイス、マイケル) である大学の日本語授業の「コミュニケーション活動」(アン、ジョイス) や「話す練習」(シンシア) を重視した日本語学習によさを求めているところがあった。

独学だと一人で勉強して、誰とも話す機会がなく、日本語でどう言ったらいいとか、表現する機会もなかったのも、このコースで日本語でたくさん話す機会があったのは本当によかったです (クリス)

このクラスはトピックや場面ベースになっているので、もっと実践的で本当の会話ができると思いました。(アン)

大学の授業は実践的です。特に話したり、聞いたりする練習がたくさんあるのでいいと思いました。(シンシア)

大学の授業だと同じ年代の人と同じ学校で、共通のテーマについて話し合えるので、とてもいいと思いました。(ドリーン)

大学での学習は話す練習がたくさんあります。そして、先生も日本人です。(マイケル)

また、コミュニケーションを意識した活動のみならず、大学の教師が日本人であり、「日本人と話す」ということが大学で日本語を学習することの一つのメリットとなっていた。

4.3 日本人・日本語・日本文化

一方で、学習者が大学で日本語を学習することの良さを日本人と話すことと考えているように、日本人や日本語、日本文化に対して強い憧れを抱いている様子も見られた。

ドリーン：日本の会社とは限らないけど、日本文化と関係して働きたいです。

筆者：それはどうしてですか。

ドリーン：たぶん、日本人はいつも真面目ですから。そして、日本人はとても明確で、的確に物事を進めると思います。その文化が好きですから、そういう文化と関係して将来働きたいです。

また、他の調査協力者らも「日本人は親切」(シンシア)「日本人は丁寧」(ジョイス)と行ったことばを使い、日本や日本人に対して好意的な印象を持っていた。そして、日本や日本人への好意的な印象だけではなく、「日本人の働き方は真面目で、見習うべき」ところがある(クリス)や「日本はアジアを牽引している国」(ドリーン)、「日本は優れていて、中国や香港の商品は日本を真似」ている(クリス)と述べ、調査協力者らは日本が優秀な国という認識を持ち、日本対中国・香港という二項対立の見方から日本を上位のものと考えているようであった。

そしてそのような印象は調査協力者らが日常的に接するアニメや漫画、映画、ドラマといったポップカルチャーの影響を強く受けているようであった。

アン：日本文化はとてもきれいな文化で、特に日本語は本当に耳にきれいなことばだと思います。日本人はとても親切で、誠実で。

筆者：どうしてそう思うんですか。

アン：映画を見ていると全てがきれいで、例えば『ラブレター』という映画、ストーリーは本当に悲しいんだけど、とてもきれいだと思います。

クリス：日本人はいつも勤勉で、とても誠実で、丁寧さを強調していると思います。そういう文化は素晴らしいと思います。

筆者： どうしてそう思うんですか。

クリス： ドラマを見ていると、日本のイメージはそんな感じです。

教室外で日本語が使われていない外国語環境では、日本人や日本語、日本文化との接触が少なく、日本のポップカルチャーが日本文化の象徴として調査協力者らに受け取られていた。そして、そこから得た情報が日本や日本文化に対する憧れのイメージの構築へとつながり、その憧れから日本を上位に位置するものとして認識しているようであった。

4.4 アカデミック・ジャパニーズとは

では、このような状況での大学における日本語教育の役割とは一体何なのであろうか。調査協力者らに日本語学習における“アカデミック”とは何だと思うか尋ねたところ、「プレゼンテーション、エッセイ、ディスカッション」（クリス、シンシア）といった技能的なもの、「言語学知識を体系的に勉強すること」（アン）「文法事項の分析的理解」（ジョイス）といった言語学的知識を得ることが日本語学習におけるアカデミックであると考えていた。しかしながら、日本語学習を将来の就職のための投資や余暇活動として捉えている調査協力者は、そのようなアカデミック能力は「日本語のクラスでは必要ない」（シンシア、アン）「初級の日本語クラスで習う必要はない」（クリス）と述べ、必要がないと感じているようであった。その中で、現在大学で経験しているコミュニケーションや話す練習を重視した日本語教育は、将来の就職や余暇活動として学ぶという目的と合致し、調査協力者らは満足しているようであった。

だが、大学での日本語学習は企業に就職するための“就職予備校”や余暇活動を補填するための“商業施設”となるだけで果たしていいのであろうか。また、教師が日本語の授業を通して学習者らが持つ日本に対する盲目的な憧れやステレオタイプを助長するような現状で、果たして批判的思考能力の育成が重要視されている大学教育の役割を十分に担っているのであろうか。確かに言語の授業とは、ことばを教えることではあるが、日本語教育が高等教育の一端を担っているのであれば、言語学習を通じた批判的思考能力の育成は重要であるのではないだろうか。そのためには、ただ単に言語を教えるだけではなく、教科書に書かれた情報を批判的に読み解く活動（e.g. 佐藤・熊谷 2011; 瀬尾 2012a）や教室外の情報にもアクセスし、社会的なイデオロギーやステレオタイプを批判的に捉える活動（e.g. 瀬尾 2012b; Okazaki 2005）が海外の日本語教育の現場では求められているのではないだろうか。そして、熊谷（2007）が述べるようにこのような活動をマニュアル的にこなすのではなく、教師は学習者が問題提起する内容を引き出しながら、日頃の授業でも日常的に行わなければならないだろう。そうすることで、学習者自らが問題意識を発見し、実社会との関わりを通して能動的に学習する市民的教養が実現されるのではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、高等教育機関である大学で日本語を履修する学習者へのインタビューから彼・彼女らにとっての日本語学習の位置づけや経験を考察し、海外の教育現場である香港でどのようにアカデミック・ジャパニーズを実践すべきか検討した。その結果、調査協力者らはメディアなどで目にした日本語や日本文化を無批判に受け入れている様子が窺われた。そのような中で、ただ単に日本語のクラスをことばを教えるだけの場として捉えるのではなく、門倉 (2006) が述べるような市民的教養からの批判的思考能力の育成が重要になってくるのではないだろうか。通信・情報技術が発達した昨今、学習者は容易に日本人・日本語・日本文化に対する情報を得られるようになった。学習者がそれらの情報を鵜呑みにするのではなく、様々な視点から捉え直せるようになることが海外のアカデミック・ジャパニーズでは特に求められているのではないだろうか。

(瀬尾匡輝 せおまさき・香港理工大学・maseo@polyu.edu.hk)

注

1. Grade Point Average のこと。学習者個人の成績平均値を算出したもの。
2. Norton (1995) は移民が社会・経済的参加を目指し現地の言語を学習することは、従来心理学的観点から提唱されていた動機づけと捉えるよりは、文化資本を獲得蓄積するための投資 (Bourdieu & Passeron 1977) として捉えるべきだと提唱した。その上で Kubota (2011) は、日本の英会話学校での調査から文化資本獲得のための語学学習ではない、余暇活動と消費としての外国語学習の存在を明らかにした。
3. このような学習者を選んだのは調査協力者らが大学で日本語を学ぶ意味をはっきりと浮き彫りにしたかったからである。
4. ジョイスとマイケルに英語と日本語どちらでのインタビューを希望するか尋ねたところ、日本語のほうが英語よりも得意だということから日本語で行うことにした。

参考文献

- 門倉正美(2006)「<学びとコミュニケーション>の日本語力ーアカデミック・ジャパニーズからの発信」門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房, 3-20.
- 木山登茂子・中野貴子・周宏陽・上田早苗・望月貴子・蘇凱達・青山玲二郎(2011)「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本学刊』14号, 176-195.
- 楠見孝・子安増生・道田泰司(2011)『批判的思考力を育む-学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣
- 久保田竜子・瀬尾匡輝・鬼頭夕佳・佐野香織・山口悠希子・米本和弘(2012)「余暇活動と消費としての日本語学習ーカナダ・フランス・ポーランド・香港における事例をもとに」『第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』<<http://www.japanese-edu.org.hk/sympo/upload/manuscript/20121017115355.pdf>> (2013年5月5日)
- 熊谷由里(2007)「日本語教室でのクリティカル・リテラシーの実践へ向けて」『WEB版リテラシーズ』4号, 1-9.

- 熊谷由理(2008)「日本語教室におけることばと文化の標準化過程-教師・学習者間の相互行為の分析から」佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育』明石書店, 212-238.
- 国際交流基金(2011)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>> (2013年5月5日)
- 佐藤慎司・熊谷由理(2011)『社会参加を目指す日本語教育—社会に関わる、つながる、働きかける』ひつじ書房
- 瀬尾匡輝(2011a)「香港の上級の日本語生涯学習者の動機づけ-学習者の日本語ヒストリーから動機づけを探る」『アジア日本研究』1号, 11-25.
- 瀬尾匡輝(2011b)「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化-修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いた分析から探る」『日本学刊』14号, 11-25,
- 瀬尾匡輝(2012a)「クリティカルペダゴジーを取り入れた初級プロジェクト活動-海外の初級コースにおけるアカデミック・ジャパニーズの実践」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』4号, 11-18.
- 瀬尾匡輝(2012b)「ウェブを活用した批判的思考能力育成プロジェクト活動」『第5回「日本語教育とコンピュータ」国際会議予稿集』<http://2012castelj.kshinagawa.com/proceedings/Koutou/22/22_1_3_seo.pdf> (2013年5月5日)
- 瀬尾匡輝・山口悠希子(2012)「インフォーマル・ラーニング下における日本語学習-独学で日本語能力試験 N1 に合格した学習者達を事例として」『第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』<<http://www.japanese-edu.org.hk/sympo/upload/manuscript/20121015051126.pdf>> (2013年5月5日)
- 瀬尾匡輝(2013)「香港の民間語学学校で日本語を学習する高校生達の学び—構成主義の視点から」『日本学刊』16号, 92-103.
- 調査研究協力者会議(2000)『「日本留学のための新たな試験」について- 渡日前入学許可の実現に向けて』
- ロバート・M・ハッチンス(1968)新井邦男(1979)訳『ラーニング・ソサイエティ』至文堂
- 森明美(2005)「大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」を考える」『東京家政学院大学紀要』45号, 117-122.
- Bourdieu, P., & Passeron, J. (1977). *Reproduction in education, society and culture* (R. Nice, Trans. 2nd ed.). London: Sage Publications.
- Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption: Enjoyment, desire, and the business of eikaiwa. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14, 473-488.
- Norton Peirce, B. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.
- Okazaki, T. (2005). Critical consciousness and critical language teaching. *SLS Papers*, 23(2), 174-202.